http://commonf.net　E-Mail:info@commonf.net

茅風

— Breeze from the field of thatch-grass —

2009年8月17日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 28 号

ナワシロイチゴに群がるヒメシジミチョウ

■5月～7月の活動報告　（事務局　）…… 1
■特別寄稿「火の道、炭の道」（水口　哲）…… 2
■特集：生き物調べとフットパス地図づくり …… 3
○初めての生き物の調査と古道探索（逸見マリオ修三）
○峠のフットパス地図作りと生き物調べ（跡部喜美子）
○ヒダサンショウウオの愛らしさに心奪われました（永野貴裕）
○腰の低さと押しの強さと。
あるいは、クマタカとアカショウビンと。（植原　彰）
○生き物調べの中間報告です（海老沢秀夫）
○生き物調べ・番外編−藤原は気候変動の最前線！（清水英毅）
■夏期「自然ふれあい環境学習」の受け入れ（事務局）……9
○写真でみる麗澤中「水源の森フイールドスタデイ」
○川越小「里山探検隊」～ハラガキ、里山を跳梁跋扈！
■「会員・会友」便り　……10
○武さん、ありがとうございました　（高橋志津子）
○カンタンのちょっといい話し　（大前清禄）
○黒松内「北限のブナ林とフットパス」（川端英雄）
○新規正会員＆協賛会員のご紹介（事務局）
■編集後記～塾長のつぶやき～　…… 13
■第4回講座「コモンズ村・ふじわら」のご案内　……14

■　5月～7月の活動報告　事務局

○5 月 7 日；**幹事会。第 2 回講座「コモンズ村・ふじわら」**、麗澤中「樹木観察会」ならびに川越小「里山探隊」の事前準備・役割分担の決定。　法人協賛会員増大キャンペーンの進め方、他討議。

○5 月 16 日～17 日；**第 2 回講座「コモンズ村・ふじわら」**。初日は草原内侵入樹木の除伐と生き物調べ。2日目は青木沢峠のフットパス地図づくり。林三郎さん林幸夫さん、貴重なお話をありがとうございました。（参加15名）

○5 月18日；**みなかみ町役場訪問**、観光商工課林課長・真庭次長と「草原再生ネットワーク総会」の受け入れ事前準備、ほか懸案事項の打合せ。（清水、北山）。

○5月23日；**麗澤中学「樹木観察会」**。湯本幹事以下、担当スタッフのみなさまご苦労さまでした。

○5月24日；**初の試み「東京学習会」**を中央区立女性センターにて開催（右下写真、ご参照）。第1回のテーマは「森林塾青水の歩み」（講師・清水塾長）ならびに「塾にたいする私の思い、期待」（座長・高野幹事）。塾の生い立ちや「青水」命名の謂れ、「飲水思源」の意味など、参加者11名が熱心に聴講、意見交換。ご発案者の川端幹事、ご苦労さまでした。

○5 月29日～31日；川端・清水会員が森林文化協会主催の「北海道黒松内のフットパスを歩く旅」に自主参加。海老沢名ガイドのもと、日本の最先端をゆくフットパスの状況を目と足で現地学習。（11～12 頁、ご参照）

●6月3日；**幹事会。**第3回「講座コモンズ村・ふじわら」の事前準備・役割分担の決定、年会費の受け入れ状況ならびに新入会員、寄付金受け入れの報告、など。

●6月20日～21日；**第3回講座「コモンズ村・ふじわら」**に併せて、**「全国草原再生ネットワーク」総会**の受け入れと交流会を開催。初日、上ノ原の生き物調べに並行してネットワークの高橋佳孝会長以下、役員諸氏13名をフイールドにご案内。その後の同ネット総会に清水塾長・浅川幹事のほか、町役場から腰越副町長以下4名、地元から林親男、林三郎、林実治、雲越萬枝の皆さんがオブザーバー出席。夜は、民宿「吉野屋」にて塾生、ネットワーク、町役場・商工会が合流して盛大に交歓、交流の実をあげた。2日目は寺山峠の視察行と並行して、ネットワークの皆さんを藤原集落と青木沢峠にご案内。明川の大坪祥一さん、師入の林三郎さん、林幸夫さん詳しいご説明ご案内をありがとうございました。（コモンズ参加22名。詳細；本文・特集ご参照）

●**6月22日；みなかみ町商工会・山田指導員を訪問**、教育旅行ならびに秋の健康ハイキング受け入れにあたり、再生なった峠道・フットパスの活用策を事前協議（清水塾長、北山現地事務所駐在）。

●**6月24日；地球環境基金のヒアリング**に浅川幹事・川端幹事・清水塾長出席。

○**7月1日；幹事会**。生き物調べの結果の中間報告、麗澤中ならびに川越小フールドスタデイのスタッフ・役割分担決定、第4回コモンズの開催準備、草原サミット in 北広島への参加者・役割分担決定、など。

○**7月4日～5日；**内野（み）、高橋、三好、川端、成瀬、清水の当塾会員が「遠足の会」（松井一郎会長）主催の**『お茶講体験＆嵩山ハイキング』に参加**。上ノ原のススキで葺いた茅葺きのお茶講会館（中之条町白久保）で、町田さん（当塾会員）が采配する鎌倉時代より伝承のお茶講（国指定重要無形文化財）を楽しみながら交流した。（塾のブログにお茶講体験記がアップされています。興味のある方はご参照ください）

○**7月15日；麗澤中「水源の森フイールドスタデイ」。**中学1年生105名・教師13名を湯本、高野、岡田、佐山、三好、浅川、海老沢、北山、中島（武）、清水で受け入れ。地元の林親男さん、雲越萬枝さん、林実治さん、ありがとうございました。塾のスタッフの皆さん、ご苦労さまでした。（9 頁、ご参照）

○**7月19日；第2回目の「東京学習会」開催**、於いて中央区立女性センター。テーマは「生き物しらべ～ここまで出来ました」。講師・海老沢学監の平明な報告に加え、多葉田さんからご提供いただいた貴重な写真を回覧しながら、参加者14名が生物多様性保全の今日的意義など熱心に聴講、意見交換。

○**7月23日；川越小「里山探検隊」の受け入れ**。小学5年生28名・教師3名を内野（雄）、内野（み）、北山、三好、清水で受け入れ。（10頁、ご参照） 林三郎さん、お米作りのお話や田んぼのご案内ありがとうございました。スタッフの皆さん、お疲れさまでした。

■ 特別寄稿「火の道、炭の道」　水口 哲

「日本環境ジャーナリストの会」の要職を務められる水口さん。ご多忙のなかをぬって、4 月の野焼きから 5 月、6 月の生き物調べとフットパス地図づくりに連続して参加されました。その水口さんの眼に映った上ノ原「入会の森」。さて、どんな印象をおもちになられたのでしょうか（編集子）

火の道

野火が枯草に燃え広がる。静かな音を立てる。揺らぐ。舞う。雪の防火帯に気づくと、向きを変える。生き物のようだ。温められた大気が、谷川岳の白峰を揺らす。東には武尊山の群青色の頂。その先を雲が越えてゆく。火と雪の大地の上には、青空の天幕。

枯野を進む火と、退場する火が交錯する。それをじっと見つめる老人がいた。目が会うと、少年のような含羞を浮かべた。彼の瞳には何が写っていたのだろうか。村総出で参加した半世紀前の野焼きか。山の炭焼き小屋を引き上げる時に父親と見た雪原か、月明りのススキ草原か。

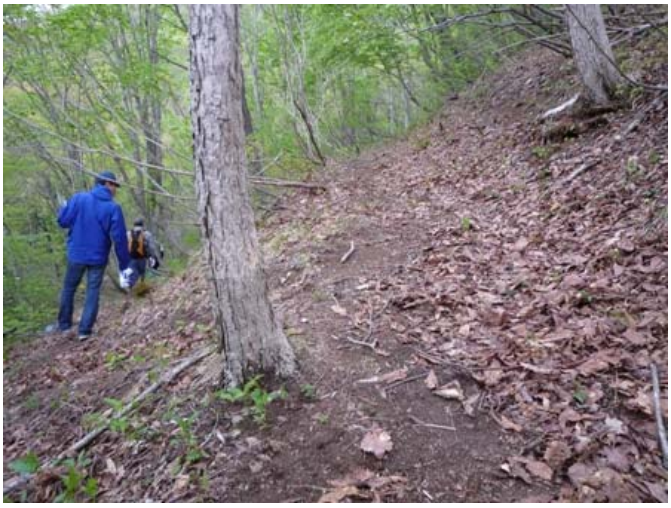
火の跡

野焼きから1ヵ月後の5月中旬。焼き跡には新芽が吹いていた。黒焦げになったススキの茎の内側には、今年の茎が育っていた。長さは 10 ｾﾝﾁから 20 ｾﾝﾁほど。蕗、蕨、蓬の小学生や中学生もいた。焼くことで、枯れ草が燐とカリに変わる。害虫の卵や、雑草の種子の力を弱める。焼くことは、安全な肥料と農薬を撒くことに等しかった。野焼きを止め、草原利用を放棄した戦後の農業。輸入飼料と農薬に依存する農法への一本道でもあった。

炭の道

カラマツの若葉がそよぐ。戦後、ススキ草原に植林されたものだが、カラマツに罪はない。背後の山々は青、緑、薄緑に衣替えしていた。

ススキ草原から沢沿いに木馬道（きんまみち、写真）へ入る。この道は、丸太や炭を木橇や馬で運んだ森の



中の古道である。道沿いに、ニリンソウやヒトリシズカの群生が迎える。

昔は、8月にススキ草原で馬草刈りを済ませ、秋の稲刈りが終わると、冬の長い炭焼きが始まった。小屋掛けをし、炭焼き用の石窯をつくる。長さ1ﾒｰﾄﾙ余りの鋸と鉞で木を切る。炭にいいのは楢、楓、ブナ、ミネバリ。道具を持って何度も通った道。

低炭素革命への道

働くことは歩くこと。炭の道は、足の道、馬の道。半世紀前の燃料革命が、炭と馬と足の道を止めた。燃料革命の連れ子は、気候変動でもあった。その嵐を逃れ、安定した気候と自然の恵みをかみしめるのが低炭素革命である。火の道、馬の道、足の道は、その道につながっている。

■ 特集：生き物調べとフットパス地図づくり

◆初めての生き物の調査と古道探索　逸見マリオ修三

海外勤務の長かった逸見さん。ふるさと日本の草原と峠の古道のご印象は・・・・。（編集子）

6月 20 日から21 日の両日は、上の原「入会の森」で、私としては初めての生き物の調査と、フットパス地図作りに挑戦を試みた週末でした。

初日の 20 日の天気は我々の味方をしてくれ、水無月とは思えないような清々しく晴れた一日で、入会の森の生き物たちも活発な動きを見せていました。4月の野焼き後の寂しかった茅場も、今ではすっかりと精気を取り戻し、入会の森一面に生えた若いススキの凛とした瑞々しい蒼さからは、人間が少し手を加えれば自然も本来の力強さを取り戻すことが可能なのだと、今回あらためてこの作業の重要性を垣間見た思いがします。

森の下部では野芝・雑草オオバコ・苦菜・野薊などの植物や姫蜆という小さな蝶、境界周辺では素朴なピンク色の谷空木・姫寒菅・山芥子などが茅場に可愛いアクセントを提供し、茅場を飛び交う揚羽蝶や薄羽白蝶は微風と共に、それを見る者を癒すような優しい動きを見せていました。
まさに茅場に元気が戻ってきたという実感が味わえた光景でした。
上部の境界線から上の自然林では、その森の住人たちを強い陽射しから守るように、樹木たちが季節に遠慮なく枝葉を伸ばした様は、混沌とした思想の入り込む余地のない、自然法則に則ったシャングリラ的世界を表現しているのが肌で感じられる程でした。

二日目の 21 日には、雨の音で目が覚めたのですが、雨天決行ということで、榛名神社のある明川桜の里へ移動。地元に住む大坪祥一さんの引率で、この地域の生活水源となっている明川と平行していて荒れ放題の寺山旧街道を登り詰め、明川源流のある熊穴地域を調査。熊もよく出没するというこの地域には、入会の森同様に素晴らしい原生林が存在していたことに驚きました。今回は、二日目が雨天ということもあり、寺山フットパス地図作りのための前段である聞き取り調査に終始したのですが、入会の森の調査ではリーダーの海老沢秀夫さんの植物や生き物に関する知識の豊富さに脱帽し、明川では地元の名士、大坪祥一さんの故郷の生活理念に大きな感銘を受けました。
ここに、清水塾長をはじめご指導いただきました皆様に深く感謝の意を表します。

今回は私の二回目のフィールド作業でしたが、道のりはまだまだ長いようです。

◆峠のフットパス地図作りと生き物調べ　跡部喜美子

あちこち幅広く活動されている跡部さん。昨年の茅刈りに続いて 2 度目のご参加。森林塾青水の活動についてお感じになったことを語っていただきました（編集子）

昨年の 10 月茅刈りコンテストに参加しました。その時は大きなイベントだったので普段どんな活動をしているのか興味がありましたので参加しました。「森林塾青水」「飲水思源」などまだまだ固い印象が抜け切れていません。今回もマイ鉈、マイ鋸を持ち込み、山しごとの出来る体勢で乗り込んできました。結果は空振り。

生き物調査は花の付いている植物を中心にその状態を記録していきます。花が咲いているとか蕾だとか、実になっているとか。そして周りの環境も。窪地だとか湿地だとか、陽当たりが良いとか悪いとか。木の種類も記録します。花の写真も撮ります。そんなことをして皆で歩いていたので地域は広くありませんが、このように記録していると植物の名前も良く覚えられます。これを 1 年続けるというのは気の長い話ですが、調査はこういう努力を積み重ねていかなければならないのだということがよくわかりました。

2 日目のフットパス作りは朝から雨でしたが、土地の人にガイドを頼み植生や祠などの人々の営みを記録していきました。青木沢の峠道は何年か前まで利用されていた道です。幅も広く高低差もあまりなく歩きやすい道です。こうやって道を整備してその地域の歴史や人々の営みを書き残しておくことは住んでいる人にとっても地域を見直す事にもなり、やり方によっては観光資源にもなり得るので良い試みだと思います。自然を荒らされるなど負の部分もありますが皆の知恵を集めて成功させていただきたいと思います。何よりも地域の人がフットパス造りの核になってもらえるような方策を探る必要があると思います。ガイドツアーなどを森林塾で担うなどということも考えられるかと思います。

◆ヒダサンショウウオの愛らしさに心奪われました

日本大学大学院修士１年　永野貴裕

「草原再生ネットワーク」会員にして日大（生物資源学科）大学院で草原をテーマに研究されている永野さん。日頃、私たちが気づかないでいることを教えていただきました（編集子）

初めまして、日本大学大学院に所属しております永野と申します。この度、私のような若輩者が筆を取らせて頂き、まことに恐縮でございます。大学院における研究テーマと致しまして富士の草原をフィールドとさせて頂いております。そこで草原における他団体の活動に興味を持ちまして、この度参加をさせて頂きました。他のフィールドを見学するのは初めてで、全く異なった環境の草原を見ることができ、とても勉強になりました。

また夏場のスキー場を拝見するのも初めてで、文献や資料などで言われる夏場のスキー場における草原というものがどういった状態なのか見ることができて、大変貴重な体験ができました。草原以外でもみなかみという場所はいくつも見所があり、古民家からふもとへ続く田んぼ、そして山道を用いたフットパスなど、本当に魅力がぎゅっと詰まった素敵な空間でした。特に山道ではふもとのカツラ沢ではヒダサンショウウオ、その後青木峠の尾根付近ではカモシカを見ることができ、両者の愛らしさにしばし心を奪われてしまいました。参加されていらっしゃる皆様とのお話ではこの活動の経緯を伺い、自分も普段使用している飲用水がどのような場所から送られているのかなど深く考えなければならないと思いました。

また、ご活動のお話をされる皆様は本当に楽しそうなお顔をされており、明るく気さくにお話をさせて頂きました。近頃は農村の多面的な機能（治水、防災、生産、文化資産など）がよく取沙汰されており、その恩恵を受けている下流域の都市住民が今後どのように関わるべきかという議論が見受けられますが、今回参加させて頂いた皆様方のご活動はそういった流れの最先端をいくものであり、とても素晴らしいご活動であると存じます。今後の皆様の益々のご活躍を心待ちにしております。

最後となりましたがこの場をお借りしまして、今回お世話になりました森林塾青水塾長清水様をはじめ皆様方に厚く御礼申し上げます。

◆腰の低さと押しの強さと。あるいは、クマタカとアカショウビンと。　植原彰

植原さんも「草原再生ネットワーク」会員で山梨県にある「乙女高原ファンクラブ」のリーダーさんです。当塾の活動に参加されて、草原の保全活動をされるうえでのヒントを4つも得られそうです！　さてそれは何・・・・？（編集子）

山梨県に「乙女高原」という草原があります（いい名前でしょう？）。私たちは「乙女高原ファンクラブ」という市民グループを作り，この草原を核としたエリアの保全活動を行っています。

今回，森林塾・青水の皆さんが地元コーディネーターをお引き受け下さった全国草原再生ネットワーク総会に参加しようと思ったのは，同じように草原の保全活動を行っている皆さんからヒントやエネルギーをいただきたいと考えたからです。ところが，いつの世も「もらう」だけの一方通行は成り立ちません。青水のSさんから原稿依頼を受けました。腰の低さと押しの強さについつい引き受けてしまいました。今回いただいた「活動の最大のヒント」は「腰の低さと押しの強さ」です。

1日目（6月20日）には，青水の皆さんが地元の皆さんと融合して保全活動をしている草原を見せていただきました。ちょうどメンバーの皆さんが集まって，「草原の生き物調査」を始められていました。赤白の杭を10本ほど草原の中ところどころに刺し，それを目印にして，そのまわりで見られる植物や蝶を記録するのだそうです。今後，調査を継続するそうですが，このようなモニタリングはとても大切だと思いました。たとえば，「○○という花が少なくなったような気がする」と印象を語るのは簡単ですが，ほんとうに減ったかどうかは，調べたデータを元にしなければ断言できません。地道な継続調査の結果こそが，そこの自然の姿を語ってくれるのだろうと思いました。ヒント2です。

草原は乙女高原以上にススキが優先していました。乙女のレンゲツツジの代わりにタニウツギがきれいな花を咲かせていましたが，このタニウツギが草原内にどんどん侵入してきていて，それが大きな問題なのだそうです。ニガナやノアザミが咲き，四六時中，ホトトギスの鳴き声が響いていました。

1日目の午後は「全国草原再生ネットワーク」の総会

でした。この組織はまだまだ歴史の浅い団体ですが，日本の「絶滅危惧場所」になってしまった草原を保全するための知識や知恵，活動の工夫などを交流し，個々の草原を保全する活動をバックアップしていこうという熱い想いを持った方々が運営されていることがよく分かりました。

総会後にセッティッグされた意見交換会では，みなかみ町の副町長さんや観光課長さんを始め，そうそうたるメンバーが参加してくださいました。あらためて，青水の皆さんが地域にとけ込んでいることが分かりました。活動のヒント3です。

夜は夜で，山菜三昧のおいしい料理をおかずに，夜遅くまで草原談義が続きました。

2日目（6月21日）は青水の皆さんが取り組んでおられる「フットパスづくり」のフィールドを見学させていただきました。昔は使われていたのに今は使われなくなってしまった古道を復活させ，それを観光資源として活用しようというものです。

途中，美しい田んぼが広がっている地点で，青水の方が地元の方にインタビューして，様々な情報を引き出すのを，ぼくら参加者が聞かせていただく・・・というシーンがありました。私たちは乙女高原案内人養成講座を開催し，その修了生に乙女高原のボランティアガイドをお願いしているのですが，講座の講師が「インタープリターは，よきインタビュアーであるべきだ」というお話をされていたのを思い出しました。青水の方が地元の方をお呼びするのに，「ウエハラさん」と苗字ではなく，「アキラさん」などと下の名前で呼んでいたのが，とても印象的でした。ヒント4です。

見られた生き物たちもすごかったです。1日目，草原の上空をクマタカと思われる猛禽が飛びました。泊った民宿の裏の川からは，アカショウビンの大きな声が聞こえてきました。2日目，ごく普通のアスファルト2車線の道路のすぐ脇の水たまりに，サンショウウオの卵塊がいっぱい。これらも魅力ある地域資源だなと思いました。

参加してみて，青水の人たちが地元の人たちと首都圏の人たちをつなぐ「仲人」役を上手にしており，地元には地域活性を，首都圏の人たちには癒しをもたらしている・・・という関係性が見えてきたような気がしました。この素晴らしい関係を，おそらくは試行錯誤しながら創りあげてきた青水の皆さんのご努力に敬意を表したいと思います。

青水の皆さん，ネットワークの皆さん，このような機会を与えてくださり，ありがとうございました。

（うえはら　あきら・乙女高原ファンクラブ
http://www.kcnet.ne.jp/~otomefc/）

◆「生き物調べ」番外編
ー藤原は気候変動の最前線！？　清水英毅

短足で豪雪地帯には住めないはずのイノシシが3年前から藤原にも出没し始めた。その結果、何が起こったというのでしょうか？（編集子）

6月20日～21日,今年度第3回講座「コモンズ村・ふじわらー生き物調べと寺山峠のフットパス地図づくり」を開催。全国草原再生ネットワーク「総会」にあわせて地元や役場の皆さんとの「交流会」を併催したので、延べ参加者85人におよぶ賑やかな集いとなった。

人の賑わいもさることながら、「人と生き物が入り会うコモンズ村・ふじわら」を標榜する我々にとって嬉しかったのは、日ごろ見かけない生き物たちにも出会えたこと。クマタカ、アカショウビン、ノスリにヤブサメなどの鳥類。ネットワークの皆さんをご案内した師入では今年もサンショウウオに会えたし、古道・青木沢峠の道中では、ヤマアカガエル（写真）、ギンリョウソウ、イチヤクソウに、エゾハルゼミ（写真＝脱け殻）の大合唱のなかカモシカ君も出迎えてくれた。

峠の頂（標高 887m）で十二神様（じゅうにさま＝山神）にご挨拶、尾根筋に展開する美しいブナ林で一服。ブナ林からカラマツ、スギの人工林に変わる坂道を足取りも軽く下る。そこまでは順調だったのだが、青木沢集落に間もなくというところで異変が相次いだ。なんと、庚申塔の胴体部分が台座を残して、道端に転げ落ちていたのだ。5 月に来た時には、ちゃんと座っておられたのに。隠れ切支丹伝説のある石塔だが、人間業とは思えず、犯人はサルかクマかという事になったが疑問を残したまま下山。

そこで又、次なる異変に気づかされた。一行 11 人中 4 人もがヒルにやられていたのだ（写真）。「これまでは出ていなかったのですが、とうとうここまで来てしまいましたか」と地元ガイドの吉野一幸さん。5 月にこの峠道を歩いたときに、イノシシの**ぬたば**をいくつも見たことを思い出した。豪雪地帯の藤原には住めないはずのイノシシが出没し始めたのは3年前からのこと。そういえば、今年も雪が少なくて野焼きの日程が1週間前倒しになった。地元の篤農家・林幸夫さんにお尋ねしたところ、峠の麓・師入田んぼの最高積雪記録は 09 年・130cm、08 年・160cm、07 年・60cm、06 年・240cm、05 年・210cm。イノシシが出没し始めた3年前から雪が激減してきている。サルは随分以前から集落内を闊歩している。とすると短絡的かもしれないが、ヒルを運んできたのはイノシシということになる。

トウホクサンショウウオにヒルの組み合わせ。これって、ゆたかな生態系？　違うよね。　雪が少なくなる事によって、地域固有の生態系が変わりつつある兆し。さすれば、上ノ原は生物多様性のホットスポット、藤原は地球温暖化の最前線ということになろうか！

◆生き物調べの中間報告です　　海老沢秀夫

生き物調べのカリスマ・リーダー海老沢学監がまとめてくれた、皆さまお待ちかねの中間報告。必読です！（編集子）

ここ数年、フィールドの上ノ原で続けている「生き物調べ」の中間報告です。次ページに掲載したリストは、7月 19 日（日）、東京都中央区の「女性センターブーケ21」で開いた「勉強会」の資料をもとに作成しました。植物類は、講座「コモンズ村・ふじわら」の「生き物調べ」プログラムで調べたものが中心です。チョウ類、鳥類、昆虫類の大部分は、多葉田さん（会員）によるものです。

ススキ草原は一様ではない

リストにあがった草原部分の植物の種類は、

草本類	94
シダ類	2
木本類	38

です。中には名前の「あやしい」ものもありますが、おいおい正確なものにしていきたいと考えています。また、調査が進めば種類はもう少し増えるでしょう。

ところで、上ノ原のススキ草原は、ススキ一色の一様な草原ではありません。おおよそこんな風に分けることができそうです。

（1）入口広場
（2）ススキ草原（やや貧栄養地）
（3）ススキ草原（やや富栄養地）
（4）林縁部分
（5）十郎太沢沿い

（1）の入口広場は、機械による刈り払いや人の踏みつけなどの外圧が強い場所です。そのため、背が低くて頑丈なノシバやオオチドの群落が見られます。踏みつけがさらに激しい場所では、オオバコも広がっています。また、セイヨウタンポポやニセアカシアなどの外来種も確認されました。

ススキ草原は2つです。

（2）は、斜面上部の凸地部分や、ゴルフ場方面の刈り取りが最近まで行われていたと思われる場所です。有機物が比較的薄く、ススキ以外にはワラビが目立つところです。また、日当たりのいい草地の縁にはウツボ

グサなどが見られます。

(3)は、土が少ししっとりしています。下にあげるような、いわゆる「草原の花」たちが混じる場所です。ススキ、オオアブラススキ、トダシバ、ヤマハギ、オカトラノオ、オミナエシ、ツリガネニンジン、ノアザミ、ハバヤマボクチ、ヨツバヒヨドリ、アキノキリンソウ、シラヤマギク、コウゾリナ、オトコヨモギ、オオタチツボスミレ、キジムシロ、ミツバツチグリ

(4)の林縁部は、ミズナラ林とススキ草原の接点付近です。土は肥え、湿潤で、タニウツギやカエデ類などが生えて疎林状態のところもあります。クロバナヒキオコシ、ヤマエンゴサク、タニギキョウ、シロバナエンレイソウ、ヒトリシズカ、ニリンソウなどが見られます。

(5)の十郎太沢沿いは、上ノ原を流れる小川です。低木のコマユミが岸辺を覆い、ニリンソウやヤグルマソウが群落を作っています。

というわけで、たった10ヘクタールの上ノ原のススキ草原ですが、いくつもの生態系がモザイク状に混じり合っていることがわかりました。上ノ原の生物多様性は、こうした異なる環境がいくつも混じり合うことで保たれているとも言えます。上ノ原の管理も、こうした多様な環境に配慮した方針が求められます。

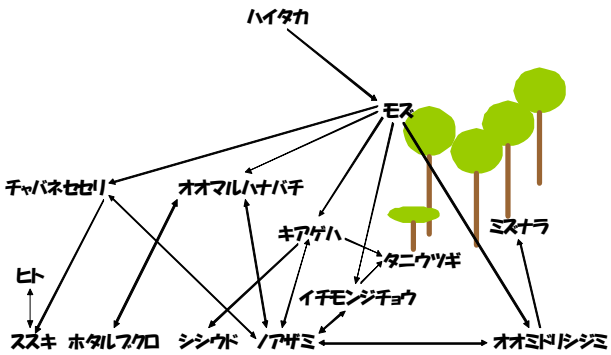
生物多様性は命のつながりの風景

ページのチョウ類リストに、「食草」の覧を加えました。チョウの幼虫は特定の植物を食べて育ちます。はたして上ノ原のチョウたちは、草原一帯で食草を確保できるのかどうか―。結果は、何とか近くの植物で間に合いそうでした。

草原はチョウの宝庫とされています。それは、食草だけでなく、成虫になってから吸蜜する花が豊富にあることも関係しているのでしょう。好みの花もあるようで、旅するチョウ、アサギマダラはヨツバヒヨドリが目当てです。ヒメシジミはナワシロイチゴのまわりをよく飛んでいました。草原の植物とチョウは、地球上に草原が広がった頃から、互いに深く関係し合って進化してきたのでしょう。

上ノ原には、チョウ以外にもいろいろな生き物が暮らしています。たとえばリストにあげた野鳥たち。これもたまたま上ノ原にいたというよりは、草原をねぐらにしたり、草原の他の生き物をエサにしたりして、深いつながりの中で暮らしています。たとえばホオジロ。ススキの中で巣を見つけたことがあります。オスはよく、草原の中にぽつんと生えたシラカバの梢なんかでさえずっています。エサになる昆虫もススキ草原にはいっぱいいます。

上ノ原にはこうして、いろんな生き物が暮らし、食べたり食べられたり、受粉の仲立ちをしてもらったりしながらいろんな関係で結びついています。上ノ原の生物多様性は、生き物たちの命のつながりの風景そのものなのです。下の図は、その関係を想像して模式的に示したものです。



フィールド（草原部分）の植物

草本類　94種

●キク科
ヤマハハコ
カセンソウ
センボンヤリ
ヨツバヒヨドリ
アキノキリンソウ
ヒメジョオン
シラヤマギク
ゴマナ
ノコンギク
フキ
オオハンゴンソウ
ハンゴンソウ
オカオグルマ
ノコギリソウ
ヨモギ
オオヨモギ
オトコヨモギ
ノハラアザミ
ノアザミ
ハバヤマボクチ
コウゾリナ
セイヨウタンポポ
ニガナ
●キキョウ科
ツリガネニンジン
ソバナ
タニギキョウ
ホタルブクロ
ツルニンジン
●オミナエシ科
オミナエシ
オトコエシ
●アカネ科
アカネ
クルマムグラ
●オオバコ科
オオバコ
●はまうつぼ科
ナンバンギセル
●ゴマノハグサ科
シオガマギク
●シソ科
ラショウモンカズラ
ウツボグサ
イヌトウバナ
クルマバナ
クロバナヒキオコシ
ヒキコシ
カメバヒキオコシ
●サクラソウ科
オカトラノオ
コナスビ
●セリ科
オオチドメ
シシウド
●ウコギ科
ウド
●アカバナ科
ヤナギラン
メマツヨイグサ
●スミレ科
スミレ
オオタチツボスミレ
タチツボスミレ
ニオイタチツボスミレ
ツボスミレ
●ヒメハギ科
ヒメハギ
●ツリフネソウ科
ツリフネソウ
●フウロソウ科
ゲンノショウコ
●マメ科
ノササゲ
ミヤコグサ
アカツメクサ
●バラ科
キジムシロ
ミツバツチグリ
オオダイコンソウ
キンミズヒキ
●ユキノシタ科
ヤグルマソウ
トリアシショウマ
●アブラナ科
オオタネツケバナ
ハタザオ
●ケシ科
タケニグサ
ヤマエンゴサク
ミヤマキケマン
●キンポウゲ
ウマノアシガタ
ボタンヅル
イチリンソウ
ニリンソウ
アキカラマツ
サラシナショウマ
●タデ科
ミズヒキ
イヌタデ
イタドリ
●イラクサ科
クサコアカソ
●センリョウ科
ヒトリシズカ
フタリシズカ
●ラン科
ネジバナ
●ヤマノイモ科
ヤマノイモ
カエデドコロ
●ユリ科
ヤマユリ
オオウバユリ
シロバナエンレイソウ
●イネ科
イチゴツナギ
トダシバ
オオアブラススキ
ススキ
ノシバ

シダ類　2種

●ハナワラビ科
フユノハナワラビ
●コバノイシカグマ科
ワラビ

木本類　38種

●スイカズラ科
ミヤマガマズミ
タニウツギ
●モクセイ科
マルバアオダモ
●リョウブ科
リョウブ
●マタタビ科
マタタビ
●ブドウ科
ヤマブドウ
●キブシ科
キブシ
●カエデ科
ウリハダカエデ
ヒトツバカエデ
アカイタヤ
コハウチワカエデ
ハウチワカエデ
●ニシキギ科
ツルウメモドキ
クロヅル
ヒロハツリバナ
マユミ
コマユミ
●ウルシ科
ヤマウルシ
●ミカン科
キハダ
●マメ科
ニセアカシア
ヤマハギ
●バラ科
アズキナシ
ウワミズザクラ
オオヤマザクラ
ナワシロイチゴ
クマイチゴ
モミジイチゴ
●クスノキ科
オオバクロモジ
●クワ科
コウゾ
ヤマグワ
●ブナ科
クリ
ミズナラ
●カバノキ科
クマシデ
ケヤマハンノキ
ウダイカンバ
シラカバ
●ヤナギ科
ヤマナラシ
バッコヤナギ

フィールドのチョウ類32種と食草（推定）

●セセリチョウ科
ギンイチモンジセセリ　ススキ
コキマダラヒカゲ　ススキ
スジグロチャバネセセリ　イネ科
ダイミョウセセリ　カエデドコロ
チャバネセセリ　ススキ
●アゲハチョウ科
アゲハチョウ　キハダ
ウスバシロチョウ　ヤマエンゴサク
キアゲハ　シシウド
●シロチョウ科
ウスバシロチョウ　ヤマエンゴサク
キチョウ　ヤマハギ
スジグロシロチョウ　ハタザオ
モンキチョウ　マメ科
モンシロチョウ　アブラナ科
●シジミチョウ科
オオミドリシジミ　ミズナラ
コツバメ　ミヤマガマズミ
ショウザンミドリシジミ　ミズナラ
ツバメシジミ　ヤマハギ
ヒメシジミ　ヨモギ、スミレ類
メスアカミドリシジミ　オオヤマザクラ
●マダラチョウ科
アサギマダラ
●タテハチョウ科
アカタテハ　イラクサ類
イチモンジチョウ　タニウツギ
ウラギンヒョウモン　スミレ類
エルタテハ　シラカバ
キベリタテハ　シラカバ
コミスジ　ヤマハギ
サカハチョウ　イラクサ類
ヒオドシチョウ　ヤナギ類
ヒメアカタテハ　ヨモギ、ヤマハハコ
ミドリヒョウモン　スミレ類
メスグロヒョウモン　スミレ類
ルリタテハ　ヤマユリ
●ジャノメチョウ科
ヒカゲチョウ　クマイザザ
ヒメキマダラヒカゲ　クマイザザ
ヤマキマダラヒカゲ　クマイザザ

フィールドのチョウ類 1975年「群馬県報告書」61種

●セセリチョウ科
ミヤマセセリ
キバネセセリ
ギンイチモンジセセリ
コチャバネセセリ
ホソバセセリ
キマダラセセリ
チャバネセセリ
オオチャバネセセリ
イチモンジセセリ
●アゲハチョウ科
ウスバシロチョウ
キアゲハ
アゲハチョウ
クロアゲハ
オナガアゲハ
カラスアゲハ
ミヤマカラスアゲハ
●シロチョウ科
キチョウ
スジボソヤマキチョウ
ヤマキチョウ
モンキチョウ
スジグロシロチョウ
●シジミチョウ科
ミズイロオナガシジミ
メスアカミドリシジミ
ミドリシジミ
ウラナミアカシジミ
アカシジミ
ジョウザンミドリシジミ
トラフシジミ
カラスシジミ
ベニシジミ
ゴマシジミ
オオゴマシジミ
ヒメシジミ
ルリシジミ
●マダラチョウ科
マダラチョウ
●タテハチョウ科
テングチョウ
コヒョウモンモドキ
ウラギンスジヒョウモン
ヒョウモンチョウ
コヒョウモン
ミドリヒョウモン
メスグロヒョウモン
ギンボシヒョウモン
イチモンジチョウ
キタテハ
サカハチチョウ
シータテハ
キベリタテハ
クジャクチョウ
●ジャノメチョウ科
エルタテハ
ヒメアカタテハ
アカタテハ
コムラサキ
ジャノメチョウ
ヒメウラナミジャノメ
ツマジロウラジャノメ
ウラジャノメ
ヒメキマダラヒカゲ
クロヒカゲ
クロヒカゲモドキ
キマダラヒカゲ

鳥類

●カラス科
ハシブトガラス
●スズメ科
ニュウナイスズメ
●アトリ科
イカル
ウソ
マヒワ
●ホオジロ科
ホオジロ
●セキレイ科
キセキレイ
●シジュウカラ科
ヒガラ
●モズ科
モズ
●ヒタキ科
オオルリ
●ウグイス科
ウグイス
●ツバメ科
ツバメ
●ホトトギス科
カッコウ
●タカ科
ハイタカ
トビ

昆虫類

●カミキリムシ科
ゴマダラカミキリ
ハネビロハナカミキリ
フタスジハナカミキリ
●キリギリス科
コバネヒメギス
ウマオイ
●コガネムシ科
マメコガネ
●バッタ科
ナキイナゴ
ミヤマフキバッタ
●ハムシ科
イタドリハムシ
カミナリハムシ
ヨツボシナガツツハムシ
●ハンミョウ科
マガタマハンミョウ
●トンボ科
アキアカネ
ナツアカネ
●オニヤンマ科
オニヤンマ
●コオロギ科
カンタン
●シリアゲムシ科
スカシシリアゲモドキ
●ミツバチ科
オオマルハナバチ

■ 夏期「自然ふれあい環境学習」の受け入れ
事務局

◆麗澤中「水源の森フイールドスタデイ」

7月15日、麗澤中学1年生対象の「水源の森フイールドスタデイ」を開催しました。その様子を写真でご紹介します。

上ノ原入会の森広場で挨拶

上ノ原のススキ草原を散策しながら草花や昆虫たちの命のつながりを学びます

雲越萬枝さんのガイドでミズナラ林を散策しながら、林の中の涼しさを体感しました

柞(ハハソ)の泉で水源の水の冷たさを実感

上ノ原のススキが茅葺きに使われている雲越家住宅を見学して昔の藤原の暮らしを学びました

水源の森のブナ林「こもれびのみち」で土壌の観察

「こもれびのみち」の上にある田代湿原まで行きました

◆川越小「里山探検隊」～ハラガキ、里山を跳梁跋扈！

09年7月23日10時半、上ノ原の広場に川越小学校5年生28名が集結。内野（雄）、北山、清水の3班に分かれて、直ちに「五感で楽しむ里山探検」開始。ススキ草原→ミズナラ二次林→十郎太の泉で甘露の水を飲み、手を沢に突っ込んで水温当てゲーム。

昼は諏訪神社に移動、草ぼうぼうの茅葺き舞殿でわいわいがやがやお弁当。

午後は師入（もろいり）集落に下って田んぼの見学。林三郎さんに米作りのお話してもらって、雨のあぜ道散歩（写真）。どうやって用水路から田に水を引くかの実演に、「ボクもやりたい」が続出。ハラガキがミズガキに変身！　田んぼのはずれにあるお墓に連れて行って、そこから集落全体を一望（写真）。眼前に青田が広がり、その先に三郎さん達の家々があって、そのまた背後に前山があってという典型的な里山の風景がセットされている。

子どもたちは、カエルやバッタにキャーキャー騒いでいたわりに、ノカンゾウやネジバナなどの草花には反応が鈍かった。最後は青木沢峠の往復を敢行。子どもたち全員完走に比して、付き添いの先生3名中2名とシルバーガイド3名は脱落！　少子高齢化大国「日本」、野に山にハラガキが跳梁跋扈する日は戻ってくるか･･･。

終日気の抜けないガイド役だったが、三郎さんご丹精のムラサキハナマメの花（写真）に初めて出会った瞬間だけは、まことに嬉しく心和む思いだった。

■ 「会員・会友」便り

◆武さん、ありがとうございました　　高橋志津子

5月16日～17日と森林塾青水でお世話になった高橋です。青木沢峠をご案内していただいた時のことで、帰宅後、思いもかけない嬉しいことがあり、そのお礼とご報告です。

青木沢峠で食べられる山菜を採ってもらったおかげで、まあまあの収穫があり、しかも料理方法まで教えてもらい、いっぱしの知識を得てほくそえんでいました。

帰路、中国人の知人に会い、このことを話すと「中国でも春は皆で野原に草を採りにいきます。苦いけれど、それが身体に良いのです。今は行けない･･･」と涙ぐんでしまいました。「日本の草もやっぱり苦いのよ。食べる？」。即座に「食べたい！」。早速、教えてもらったとおり下ごしらえし、「味つけは自分流にしてね」と持参しました。もう満面の笑顔でした。私も嬉しくてうれしくて「こんなに喜んでもらえて嬉しい！！」･･･興奮冷めやらぬ一日となりました。

私の心は太陽でいっぱいになりました。武さん、ありがとうございました。又のご指導よろしく。

文中「食べられる山菜」とあるはタカノツメ、ヤマサンショウ、トリアシショウマ、ハンゴンソウのいずれか、と思われます（編集子）

◆カンタンのちょっといい話　　大前清禄

声はすれども姿は見えぬ、捕まえるのはなおさらムズカシイ邯鄲（カンタン）を飼っている！そんな大前さんのいい話って？（編集子）

三年前、「藤原ガイドマップ」で絵の邯鄲を知ってより、私は千葉で邯鄲をさがして飼っています（写真）。苦労してつかまえたのは初年度7匹、昨年は100匹以上となりました。「鳴く虫の女王」と呼ばれ、うす緑色の1センチ強のコオロギの仲間です。

「ルルルルルル」と低い声で鳴くのはオスで、小さな手作りの桐の箱に 1 匹ずつ入れて鳴き声を楽しみます（写真）。

飼育のためのヨモギ畑・20 坪も作りました（写真）。

興味のある友人には2箱ずつ貸し出して聞いてもらいます。昨秋貸し出した友人5人の内の一人よりこんな手紙をもらいました。「お借りした邯鄲、一匹には『邯の進』もう一匹には『鄲の助』」と名前をつけて、ひと秋鳴き声を楽しませてもらった。お礼に能に招待したい」とありました。喜んでご招待をうけたところ、東京目黒の喜多六平太（14 世家元）記念館へ連れて行ってくれました。この方は女性で学生時代、能の研究会に入られていて、なんと同級生の友人（女性）がプロの能役者になられて演じられました。

演目は「邯鄲」。

能の「邯鄲」は中国の「邯鄲の夢」の話を能のために少しアレンジしたものでした。

演者は女性としても小柄な方で、最初登場したとき子供かと思いましたが、演じられると大きく見えてきて「お上手なのだ」と思いました。彼女は虫の邯鄲は見たことはなく、友人が邯鄲の説明をしたところ、今日演じる服装は合っていると喜ばれたそうです。能は動きがゆるやかな上、言葉使いも独特で高音と低音の鼓の音と共に幽玄の世界に誘ってくれますが、眠けの方もさそってくれました。邯鄲にさそわれた貴重な楽しい一刻でした。

こときれて　なお邯鄲の　うすみどり　　某著名俳人

◆黒松内町「北限のブナ林とフットパス」　川端英雄

黒松内（アイヌ語で、「クル・マツ・ナイ」～和人の女のいる沢）

アイヌ民族は文字を持たなかったので、たぶん明治以降にアイヌと接触した日本人が、口承されてきたアイヌ語の地名？に漢字を無機的につけたのが‘黒松内’なのだろうが、この地名では土地の自然や歴史を全く感じさせず、伝承をつたえる日本の地名とは全く異なる。つまり、異文化のあったところを指し示す地名だということを実感した。

黒松内の地勢的特徴

幅２ｋｍ、長さ 28ｋｍの「低地帯」といわれるベルト状の低地が、日本海と太平洋をつなぎ、その低地帯を夏は太平洋側から低温の濃霧を、冬には日本海側から大量の雪を黒松内町に運んでくる。到着した２９日も地元で‘ジリ’とよばれる靄がわれわれを歓迎してくれた。寒かった。　この低地帯、１００万年前は海底だったそうで、きめの細かい砂様の土質の‘瀬棚層’が露出していて、貝などの化石がごろごろしている。100 万年間も圧力をかけられていて、まだ砂様の土質でいることの不思議さを感じた。

日本のブナは、この低地帯以北には存在しない。つまり、黒松内町のブナ林は「北限のブナ林」と呼ばれるわけだ。町は「北限のブナ林」を観光の目玉のひとつにしている。

町ではあたらしい漢字を造字して‘ブナ’を表現している

これまで加工しにくいなどの理由から「無用の木」～橅～と書いて、ブナと読ませてきた。しかし、ブナを‘みどりのダム’など自然環境のシンボルとして町づくりに励んできた黒松内町では、貴重な木であるとして‘木’偏に‘貴’と書いて「ブナ」と読ませている。町では、ここまで「北限のブナ林」にこだわっている。

3本のフットパスコース

フットパスって、なあんだ？知っているようでいて言葉で表現しようと思うと、どうもうまく言えない。明治時代にはずいぶん苦労しながら外国語を適切に漢字におきかえてきたのに、最近では苦労なくそのまんまカタカナにするのが大はやりで、困ったもんだといつも思って

ます。閑話休題。イギリス生まれの「フットパス」、日本語に直せば「遍路道」のこと。山道あり、里道あり、海岸あり、川道あり、森を通り、舗装路あり、畔道あり、公有地あり、私有地あり。寺がベースなので「遍路道」となるけれど、まさにフットパスそのもの。

黒松内町には熱郛（ﾈｯﾌﾟ）川、寺の沢川、黒松内川に沿い、朱太(ｼｭﾌﾞﾄ)川を渡っての3本のフットパスコースがあります。最後はいずれも町が建てた集客施設・歌才自然の家に誘導されるが、どのコースも北海道とブナ林を実感させるに充分なロケーションで、機会があれば再訪したい。

すばらしい町・黒松内町

初日の夜、地元との交流会を主催者・森林文化協会が企画してくれた。ツアー参加者11名をはるかに上まわる地元の歓迎陣が待っていた。この3月に交代したばかりの新旧の町長、議長、教育長、商工会長などの行政や、フットパスを案内してくれるボランティアのみなさんだ。観光の目玉である「北限のブナ林」を売り込むために、大げさにいえば朝野をあげての歓迎だ。この手の交流会に行政が顔を出すのは不思議ではないが、新旧の首長がそろって参加というのは自分の経験ではかつてない。ふつうは行政の断絶があるもんだ。（初日、旧町長はさりげなくフットパスを歩く一行にまぎれて歩いていた）

平成3年に‘ブナ北限の里づくり’をスタートさせてから、集客施設に26億円を投入しているが、雇用と年間15万人の集客を考えればそれ相応の効果をあげているのだろう。ハコモノだけでなく、施設での接客態度、設備のメンテなども申し分なく、また自然にマッチした景観維持のために、屋根の色を町の指定色に変更した場合費用の半額を補助するなど、施策の優先順位を充分に意識した様子が随所にみられ、地方自治のお手本がここにあり！

サラリーマンをやめて横浜から当地に移住し和菓子屋さんを開業したひと、これで商売になるの？と思わせるほどの`環境雑貨屋‘さん、ふたりして収入不安定なボランティガイドを喜んでいる夫婦、彼らをさりげなくバックアップしているフットパスの先達・小川さん親子など、黒松内町を愛する人が多いようだ。町の自然と行政が吸引しているのだろう。

なぜかフランス語

最初の集合地・町立「トワ・ヴェールⅡ（ﾄﾞｩ）」（道の駅）～ここのパンがとてもうまい～、2日目のとてつもなく広い牧草地のかなたに立っていた町立「トワ・ヴェール」（特産物手づくり加工センター～ここのお昼に出た肉もおいしかった。なぜか2つともフランス語。案内してくれたボランティアの辻野さんも、なぜフランス語なの？には・・・・「？？？」。

‘アイヌ語にしたらよかったのになあ’と、帰ってから読み始めた「日本語とアイヌ語」のページをめくりながら考えた。因みに toit vert はみどりの屋根でした。

アレッ！北海道にも・・・・。

3日目、ニセコのカシュンベツ川畔を歩いていると用水路との分岐点に、なにやら石碑が立っている。「なんとか改修記念碑」かな？と思いつつ、よくよく見れば「美・都・波・能・賣・神」のように見える。なんと「ミズハノメノカミ」ではないか。古事記によるとイザナギ・イザナミの二神が3番目に生んだ‘尿（ゆまり）に成りませる神の名は弥都波能賣神（みずはのめのかみ）’～水の神様、農耕・川の神様だ。奈良をはじめ本州ではお見受けする神様ではあるが、北海道まで進出されていたとは。北海道を開拓していった先人も、水で苦労されたのだろう。

さらにニセコで「獣魂碑」を発見。草木塔と同じように「吾を生かしてくれる牛や馬」などに感謝を捧げた、アイヌ人あるいは縄文人の自然との調和を大事にした先達の気持ちがまだ生きていたのだ。

これらの建碑の年がいずれも大正13年。関東大震災の翌年、農民組合が設立されるなど世相に緊迫の度が加わっていった時期。なにがこの地であったのだろうか？

森林文化協会は〇(ﾏﾙ)

日本の里100選に黒松内町を選び、100選ツアーの第1回に黒松内町を選び、催行予定人数にまったく満たず取りやめにした方がよかっただろうに、社員に自費参加させるほどの友情あふれる雰囲気のなかで強行させた森林文化協会の海老沢さん、ほんとうにご苦労さまでした。おかげさまで楽しい3日間でした。

ありがとうございました。あえて本紙をお借りしてお礼を申しあげます。

◆新規会員＆協賛会員のご紹介 （5月～6月）

下記 6 名の新入会員をお迎えいたしました。ご紹介して、歓迎申しあげます。

・川越陽子（サポート会員）・古高利男（正会員）
・川崎　喬（サポート会員）・水口　哲　（正会員）
・小串重治（協賛会員）　・勢井峯生（正会員）

－敬省略、入会順－

■　編集後記～塾長のつぶやき～

○**6月17日夜、朗報が入った。**古道・芦ノ田峠の青木沢口に待望の橋が架かったのだ。2007年5月～6月、峠道の再生作業をした時は、昔からの橋は落ちていて、親男さんや亨さんに応急の仮橋を架けてもらって渡った。「道は歩けるようになったけど、これじゃあ使えないね。皆で橋を架けましょうよ」と言い出して丸2年。最初、地元の（林）正之さんが「うちの杉を使って下さい」と言ってくれた。次は、藤原案内人クラブの惣一郎さんや高田さんたちと現場を視察し、橋を架けるべき場所と、必要な用材の見定めをした。塾の会員総会で中間報告したら、匿名で「足しにしてください」と寄付をしてくれる会員がでてきた。そこらの事情を、かねてフットパスづくりにご熱心な商工会・山田さんにお話したら、思いもかけないご支援をいただく事になった。最後に肝心の段取りをしていただいた親男さん、難工事と案内看板作成に汗を流された惣一郎さん、萬枝さん、利根男さん、北山さんたちに大感謝！　ここに到るまでの長い道のり。これは、現代版「ミニ結い」みたいな動きではなかったのか。あとは我々が、ちゃんとした地図を作ってフットパスとして活用するのみだ。

○**フットパスづくりでは、もうひとつ嬉しい話があった。**既に再生済みの青木沢峠や芦ノ田峠の古道が、秋の健康ハイキングや教育旅行で歩く道として採択されようとしている。宿泊は地元の民宿、ガイド役は藤原案内人クラブの皆さんにお願いする。もちろん、当塾もお手伝いする。我々の理想としてきたことの一つが、もう少しで実現する。お手伝いの最たるものは、ちゃんとしたフットパス地図づくりを急ぐこと。

○東京学習会で、**これまでの生き物調べの成果**を海老沢さんがまとめてくれた。あわせて、多葉田さんがこれまでずっと撮りためた貴重な写真を提供してくれた。お二人に感謝。草原部分の草本類 94 種、シダ類 2 種、木本類 38 種。他に、チョウ類 32 種、昆虫類 18 種、鳥類 15 種が観察されている。これらの中には、いわゆる絶滅危惧種も何種か確認されている。隣接のミズナラ二次林部分を加えたり、カエルやヘビにモグラ、ネズミやテンにカモシカなど他の種を加味すれば、もっともっと数が増えるわけだが、とにかく11haの草原を中心にこれだけの数の種が共生している。その頂点にクマタカやツキノワグマが君臨している。相当に豊かな生態系と言ってよいのかもしれない。
海老沢さん締めくくりに曰く「上ノ原の生物多様性は、生き物たちの命のつながりの風景そのものなのです」と。問題は、そのつながりの輪のなかに我々人間が、生物種の一員としてどう入っていくか、ではなかろうか。当塾が標榜する『人と生き物が入り会う茅場の再生』とはその困難な課題そのものに他ならない。「持続可能な草原の利用と管理の仕組みづくり」の期限は 10 月末。のんびりしている場合ではない。

○**このところブログづいている。**といっても、自分のではなく塾のブログに投稿するスタイル。黒松内のフットパス視察記、中之条町の茅葺き視察行、生き物調べ番外編など、塾の活動の参考になりそうな事を報告してきた。自己満足と言えばそれまでだが、ちょっぴり物足りないのは反応がないということ。折角、塾の予算で構築したホームページの一部を構成するブログ・コーナーだ。もっと、塾の関係者みんなが関心もって覗いたり投稿したりして、賑やかになってほしい。「人と生き物が入り会う茅場」もいいけど「会友・会員が入り会うブログ・コーナー」になってほしいもの。

○**武者修行・相互交流の効用。**5月、北海道黒松内のフットパスを歩いた。3人の立派な環境キーパソンに出会って大いにインスパイアされた。6月、「遠足の会」のハイキングとお茶講体験に参加。代表が急病で欠席だったが、代役さんがちゃんとリーダー役を果たしていた。7月、「ぼんぼり山の会」のボサ刈りに参加した。毎月第1土曜と第3日曜が定例活動日（つまり、年間24～25回も！）と決まっていて、毎回30名余りの会員の8～9割が参加という。こちらも、当日は会長さん欠席だったが、いずれも実に楽しく学ぶ所大なる旅だった。これまで、他団体との交流・受け入れは前向きにやってきたつもりだが、もっと積極的に取組むべき。6月には、草原再生ネットワークの皆さんをフィールドにお迎えした。その際、植原さんは我々の活動から4つものヒントを得られたと仰っている（4頁参照）。そして、高橋会長以下ネットワークの皆さんから、我々が日頃は気付かないでいたことにつき貴重なご示唆と励ましのお言葉をいただいた。相互交流の効用だ。
来る10月には、「日・中・韓環境ジャーナリスト交流会」のご一行をお迎えすることになっている。どんなご指導、ご評価をいただけるのか。それを吸収し活かせるか否かは我々の学ぶ姿勢如何であろう。

故郷はだんだん畑に藪茗荷　　（青）

■ 第4回講座「コモンズ村・ふじわら」　参加者募集案内

ススキ草原は人と生き物の入会地　**参加者募集**

講座「コモンズ村・ふじわら」２００９

第４回　生き物調べと
芦の田峠のフットパス地図づくり

森林塾青水では、ススキ草原（茅場）や古道（フットパス）など、地域の自然資源や文化資源の再生と活用に取り組んでいます。講座「コモンズ村・ふじわら」は、その実践プログラムです。講座は今年で６年目。これまでの経験と成果をふまえ、草原の持続的な利用と管理ができるよう、より良い仕組みや方法を検討していきます。第４回の今回は、フィールドの生き物調べと、芦の田峠をフットパスとして利用するための調査・聞き取り・地図づくりを行います。参加者を募集します。

■日程　　９月１９日（土）～２０日（日）
■集合　　初日の１０時２０分、ＪＲ上毛高原駅改札口
〈上越新幹線〉東京 8:52－上野 8:58－大宮 9:18－高崎 9:52－上毛高原駅 10:14
■参加費　　１０，０００円（森林塾青水正会員は 9,000 円）
※宿泊費、食費（夕食・朝食・昼食）、保険代などを含みます。初日の昼食は各自持参して下さい。現地までの交通費は自己負担です
■宿泊　　民宿関ヶ原　／群馬県みなかみ町藤原3527-3（０２７８-75-2132）
■服装など　野外活動に適した服装（長袖、長ズボン、軍手など）。その他、水筒、雨具、カメラ等
■申し込み・問い合わせ　森林塾青水事務局・コミュニティデザイン
／東京都中央区湊１-２-３プロスペリテ八丁堀３０１【電話】０３-６２２８-３５０３、【ファクス】０３-６２２８-３５０４、【メール】info@commonf.net
■当日・緊急連絡先
清水英毅携帯（０９０-３５７５-２２８３）／川端英雄（０８０-５４１５-４３５１）

参加申し込み　締切日　９月５日

第１日目　９月１９日（土）

時刻	内　　容	備　　考
１０：２０ １１：００	上毛高原駅集合 上ノ原「入会の森」へ	
１２：００	昼食・休憩（弁当は各自ご持参下さい）	
１３：００ １７：００	生き物調べ（上ノ原「入会の森」）定点９カ所の植生調査 民宿へ	海老沢指導員
１８：３０	夕食・交流会	関ヶ原

第２日目　９月20日（日）

時刻	内　　容	備　　考
７：００	朝食	関ヶ原
８：３０	フットパスの地図づくり（芦の田峠）…歩いて林相・ポイント・歴史などチェック、記録→地図化	林親男氏（予定）
１２：３０ １ ３：３０	昼食 解散→たにがわ４１６（１５：１９上毛高原駅発）	レストラン幸新

送信先	E-MAIL：info@ｃｏｍｍｏｎｆ.net ＦＡＸ：０３－６２２８－３５０４ コミュニティデザイン気付　森林塾青水事務局

第４回ﾌｨｰﾙﾄﾞｽﾀﾃﾞｨに （右記のどちらかに○印してください）	参加します	欠席します
お　名　前		
ご　住　所		
E-MAIL 連絡先		

下記に○印を付けてください

○印を付けてください	月　日	朝　食	昼　食	夕　食	宿泊	交通手段
	９月１９日(土)					自家用車 電　車 （上毛高原駅　・　水上駅）
	９月２０日(日)					

通信欄	